

日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース
1998年 冬号 No. 10

[緊急提言 ナイフを振りかざす子どもたち](#).....島宗 理
[研究所紹介 慶應義塾大学坂上ゼミ](#).....石井 拓
[JABAシアター 心の旅路:手がかりは文脈のなかで機能する](#).....伊藤正人
[報告:応用行動分析の教員養成大学院:オハイオ州立大学](#).....遠藤清香

緊急提言:ナイフを振りかざす子どもたち

島宗 理(鳴門教育大学)

ナイフを使った少年による殺傷事件が続発している。子どもたちは、なぜナイフを持ち歩くのだろうか？なぜ人を傷つけるのだろうか？

ニュースでは評論家が「家庭や学校に、子どもたちの『居場所』がなくなってきているからだ」と解説していた。教育の専門家も「受験、受験で、子どもたちが『生きる意味』を失ってしまった」と説明していた。でも、どうして『居場所』がなくなったのか、どうして受験によって『生きる意味』が失われるのか、どうして『生きる意味』がなくなるとナイフを振りかざすようになるのか、自分には彼らの論拠がわからない。

文部省は全国の中学校の生徒指導担当者を緊急召集し、学校で子どもたちの所持品 検査を実施することもやむをえないと指導した。どうやら文部省の解決策第1段は「所持品検査」のようである。ちなみに昨年神戸で起きた殺人事件直後のスローガンは「心の教育」であり、解決策の1つはスクールカウンセラーの増員だった。文部省のこうした対応をみるたびに疑問に思うことが2つある。一つは対策立案の根拠、つまり、なぜその対策が有効であると判断したのかということ。もう一つは、講じられた 対策がどれだけ効果をあげたのかを、どのようにして評価するかということである。

これが厚生省なら、たとえば新薬の認可までには厳密な動物実験や臨床実験によって、薬物の効果と人体への安全性が確認されなければならない。建設省でも、たとえば新しいダムの建設を認可するには、それがもたらすメリット/デメリット、そして生態系への影響が専門家によって客観的に査定されなければならない。ところが、文部省が主導する対策に関しては、こうしたプロセスがほとんど公開されていない。われわれには不透明な意思決定となっている。専門家による客観的な判断が行われてはいないのではないかとこの疑惑さえ生まれる。

どんな問題でも、解決のためには、(1) 原因を正確に把握すること、(2) 問題を解決できるということが、少なくとも論理的に、できれば実証的にわかっている対策を立案すること、そして(3) 対策を実施した後、その効果を正確に評価し、評価に基づいて改善を行うこと、の3つが欠かせない。原因を取り違えたと何をやってもうまくいかないし、解決できるかどうか怪しげな対策を繰り返すのは時間の無駄である。そして効果を測定しないと、対策が成功したのかどうかわからない。

「所持品検査」は(1)の原因究明を飛び越えた緊急措置だが、(2)の効果は期待できそうにない。事件の多くは学外で起こっている。検査が実施されとなれば、子どもは刃物を隠すか、学校へは持ってこなくなるだけだ。それこそ、子どもにでもわかるようなザル対策である。「スクールカウンセラー」については賛否両論あるだろう。しかし、百歩ゆずって、子どもたちの「心」に原因があり、それに対して精神療法的なカウンセリングが有効であったとしよう。そこで、私が知りたいのでは、どれだけの問題がスクールカウンセラーによって解決されているのか、その実績である。ケースの数やクライアントの自己評定だけでは正確な評価はできない。少なくとも、主訴(あるいは親や教師が問題とした行動)、処置、そして主訴に関する事前事後の行動的データが欲しい。

日本の学校教育は文部省によって集中的に管理されている。特に公立学校の独自性、独立性は非常に低いといえる。中央による集中管理体制自体が必ずしも悪いとは思わない。しかし、どうせ集中管理をするなら、問題を確実に解決できるようなアプローチで取り組み、そしてそのプロセスを公開して欲しいと願う。

さて、ナイフを振りかざす子どもたちと、それに怯える大人たちに対して、行動分析学は何ができて

るだろうか？ われわれは上記の3つのプロセスを援助する知見を持っているだろうか？ 残念ながら「行動分析学研究」をめくってみても直接適用可能なプログラムは見つからない。Journal of Applied Behavior Analysis の28巻(1995)では、これまで応用行動分析学があまり取り組んでこなかったが、現代社会の課題とされる問題が特集されている。学校における反社会的行動についての展望論文もある(Preventing antisocial behavior in the schools, Mayer, G.R., pp467-478)。しかし、アメリカで校内暴力を起こしている子どもたちと、日本でナイフを持ち歩いている子どもたちとは、その置かれている状況や行動レパートリーがあまりに違うような気がする。日本独自の研究と実践が必要である。

こうした問題への取り組みは、きちっとした実験計画も組みにくいこともあり、なかなか論文にならないだろう。だから、出版された研究が見あたらないからといって、行動分析的な実践が行われていないと判断するのは早急すぎる。そこで提案である。会員の方々に、子どもたちの暴力や犯罪防止に関わっている人がいらしたら、ぜひその実践をニュースレターで公開していただきたい。J-ABAニュースには査読がない。だから反転法や多層ベースラインはいらない。そのかわり、現代社会の要請に応えるタイムリーな実践を報告していただきたいと願う。

応用行動分析学の目的が、社会的に重要な問題行動を改善するためのテクノロジーの開発にあるのなら、われわれは、今何が社会的に重要な問題なのか、どのようにしてその解決に貢献できるのか、考えていくべきだろう。ナイフを振りかざす少年たちに対して行動分析学ができることは何か、まずはその情報交換から始められないだろうか。

研究室紹介：慶應義塾大学文学部人間関係学科心理学専攻坂上ゼミ

石井 拓(慶應義塾大学文学部4年)

私たちのゼミはガミゼミと呼ばれている。坂上ゼミだからガミゼミである。がさつな響きだとは常々思っていたが、文字にするともっといけないということにたっ たいま気付いた。坂上ゼミは人数が少ない。心理学専攻全体では各学年に約25名の学生がいるが、坂上ゼミに入るのはそのうちの2、3名である。しかも、心理学専攻全体では女性の方がやや多いのに、坂上ゼミに入るのは圧倒的に男性が多い。そのため、坂上先生は自分のゼミを『野郎ゼミ』と形容し、ガハハと笑う。

私は先生のガハハ笑いを聞き、ガミゼミという呼び方に納得してしまう。『野郎ゼミ』の元凶は笑っているご本人にある。現在(1998年1月)坂上ゼミには7.5名の学生がいる(0.5名は休ゼミ中の男性)。修士課程の学生が2名と学部4年生が2名。これらはみな男性。残りの3名が3年生で、そのうち2名が女性。1学年に2名の女性が いるのは坂上ゼミ史上初の快挙である。

坂上ゼミでは何をしているのかと尋ねられた場合、真っ先に思いつく回答は酒を飲んでいるということである。本当によく飲む。何しろ坂上先生が率先して飲む。ことあるごとに飲む。ことがなくても飲む。毎週ゼミの授業が終わった後から終電間際まで飲んでいる。場所は主に坂上先生自身の研究室である。大学の周辺で酒と肴を買い集めてくるのだ。ゼミの人数が少ないのでこういふときは小回りがきく。円卓の周りに椅子を並べれば毎週恒例ミニ宴会の始まりである。よく飽きないものだと思う。アルコールの強化力が絶大なのか。おそらくそうだろう。実験的介入としてビールをウーロン茶にかえてみれば分かることだ。しかし結果は明白なので無駄な実験はしない。では強化子はアルコールだけだろうか。そうではない。試しに全くしゃべらずにひたすらアルコールを摂取してみればよい。1時間ともないだろう。結局、私たちの宴会行動はアルコールと会話の組み合わせによって維持されていると言える。「酒の席は楽しい」ということを言うのに行動分析学では約200字費やした。

坂上先生の研究室で飲んでいるとき、最も気になるのは壁を埋め尽くすほど並べられた多くの本である。中でもいちばん目をひくのは『ヌンチャク・サイ』という本。なぜそんな本があるのか。研究室のドアのノブにはスポンジ製のヌンチャクが掛かっている。ご本人の話によると、「昔ちょっと練習してみたくなった」らしい。ブルー・ス・リーのファンという訳ではないようである。坂上先生はどうも「ちょっと練習してみたくなる」ことが多いようだ。特に楽器。私の知っているものではキーボード、尺八、ハーモニカ、パチカ(アメリカンクラッカーのような形をしたマラカスみたいなアフリカの民族楽器)がある。しかし、どれをとっても習熟しているとは言い難い。聴衆がいない場合でも、楽器を演奏する行動は演奏すること自体によって強化されると考えられるが、そうなるまでにはある程度の練習が必要である。つまり、演奏行動が演奏自体によって強化されるようになるまでは、演奏行動は外的な強化子によって維持されなければならない。しかし、研究室には坂上先生の演奏を積極的に強化しようなどという人はいない。それゆえ演奏が上達しないのは当然であり、坂上先生のことを決して「飽きっぽい」などとは言ってはいけない。

さて、坂上先生と私たちは酒を飲んだり、楽器で遊んだりしてばかりいるわけではない。私たちの

ゼミは動物を被験体とした実験的行動分析を専門としている。慶應義塾大学の心理学専攻には坂上ゼミの他にもう一つ行動分析学を専門としているゼミがある。それは佐藤方哉先生のゼミで、そちらではヒトの行動の研究が中心となっている。また、佐藤先生のゼミでは主に刺激性制御の研究に焦点が当てられていて、坂上ゼミでは強化スケジュールの効果进行研究している。特にここ数年では複数の強化スケジュールが同時にはたしている状況での選択行動が研究されてきた。現在、修士2年生の1人は選択肢間の選択、いわゆる「メタ」選択について研究している。この研究での問題は、複数ある強化スケジュールのうちの一つを自由に選ぶことができる選択肢と、そのうちの一つを強制される選択肢がある場合、被験体はどちらを好むかということである。また、現在卒業論文を作成している4年生の1人はゲーム理論に興味をもっている。彼は2つの選択肢のそれぞれが2種類ずつの結果をもつような実験場面を設定し、それらの結果を確率的に出現させたり、ゲーム理論でよく用いられるような戦略にしたがって出現させたりした場合の行動を調べている。

選択行動以外に取り上げられているものとしては、J. A. Nevinらによって研究されてきた行動モメンタムというパラダイムがある。この研究ではある強化スケジュールを使って個体の行動を維持し、次にその行動を減少させるような実験的操作を加える。そのような環境の変化によって行動が変容するときの変化抵抗を測定することがこの研究の主な課題である。行動モメンタムパラダイムのセールスポイントは、これまで反応率のみによって測定されてきた反応強度の測度として、反応の変化抵抗を取り上げた点である。修士課程2年生のもう1人の学生は学部の卒業研究のときからこのパラダイムに沿って研究を進めている。また、現在卒業論文を作成しているもう1人の4年生もDROスケジュールの下での変化抵抗について実験を行っている。

以上のような研究では、みなハトやラットといった動物を使っている。しかし、私たちの興味が動物の実験的行動分析に限られているわけではない。最近2年間のゼミの授業では Variations and Selections という本を読んだ。これは Journal of the Experimental Analysis of Behavior に掲載された書評ばかりを集めた本で、様々な分野が広い範囲にわたって取り扱われている。私たちはこの本を読みながら行動分析学と他の心理学、言語、進化論などとの関係について議論をしたが、それは興味深いものであった。このように私たちも、きちんと勉強しているのである。

ところで、よく訊かれる質問に「君はなぜ坂上ゼミに入ったのか」というものがある。この質問に対しては「インスピレーションがはたらいたから」としか答えられない。「インスピレーション」という言葉は「表象」と同じように危険な言葉だ。インスピレーションは行動の原因ではない。それゆえ、上の答えは答えになっていない。慶應義塾大学の心理学専攻には6つのゼミがあるが、その中からあえて坂上ゼミを選択した理由は自分自身にも分からない。いや、分からないわけではない。言葉では表せない何かは確かに影響していた。インスピレーションとはその「何か」に対してつけられる名前だと考えることもできる。坂上先生はいつか、やはり酒の席でこう訊いた。「もっと偉い先生のところにはいなくてよかったの？」私は答えようがなかったので日本酒のコップをもったままニタニタしていた。その日はたしか『一ノ蔵』が一升空いた。今年ももうすぐゼミ選びの時期がやってくる。どれだけの人が坂上ゼミに来るのか分からない。とりあえず今年もたくさん飲みましょう。ねえ、坂上先生。

シリーズ:jABAシアター ー行動分析的視点で映画をみるとー

「心の旅路」:手がかりは文脈のなかで機能する

伊藤正人(大阪市立大学)

「貴方の過去に寄り添っていた誰かをいつか探さだせそうな感じ?もしかしたら、その人は近くにいたり、会っていても気づかないだけかもしれないわ。知人かも...例えば、この私かもしれない」とポーラは、意を決して、記憶喪失のため自分との結婚生活を思い出せなくなったチャールズに話しかける。一瞬ポーラの顔を見つめた彼は「まさか」といって微笑む。ポーラが落胆して涙する場面である。

1942年に制作された映画「心の旅路」は、グリア・ガースン扮する踊り子と記憶喪失の男(ロナルド・コールマン)の波乱に満ちた運命と愛の行方を描いたラブロマンスである。2度の記憶喪失という心理学的題材の織りなすドラマチックな舞台設定がこのラブロマンスをひととき印象深くしている。また、1940年代という時代背景が、このラブロマンスに抑制の利いた哀調を与えていることも特筆されることであろう。舞台は、第1次世界大戦終了直後の英国。主人公のチャールズは、従軍中に記憶喪失となって自分が何者であるかがわからない。終戦の日、収容されていた精神病院を抜け出して、メルブリッジの町の煙草屋に現れたチャールズとこの町に興業のために滞在していた踊り子ポーラが運命的に出会う。チャールズ、いや仮の名前スミスに同情したポーラは、仕事をキャンセルして、郊外の宿に彼をかかまった。

こうした二人の間に愛が芽生え、やがて結婚して、小さな小川のほとり、近くに教会の見える小さな家に住むことになった。家の庭には、小さな扉があり、玄関の側には、春にはたくさんの花をつけるライラックの木が植えられていた。結婚生活も3年目、子供も生まれ、ささやかながらも幸せな生活が続いていたある日、スミスは、新聞社から作家として契約したい旨の手紙を受け取る。ようやく自立できる喜びを胸に新聞社のあるリバプールへと安物の旅行鞆を携えて出かけた。しかし、一抹の不安を感じながら、明日帰るといふ夫を送り出したポーラの前に夫は二度と姿を現さなかった。

リバプールへ出かけたスミスは自動車事故に巻き込まれ、頭を強打して、二度目の記憶喪失を起こしてしまう。3年間のポーラとの結婚生活を思い出せなくなったかわりに、以前の本当の自分(チャールズ・レイニア)の記憶がよみがえり、レイニア一家の屋敷に帰還する。その日はきしくも父の葬儀の日でもあった。父の死後、彼は、家業を継ぎ、実業家となって、英国中に名が知られるようになる。しかし、実業家として多忙な毎日を過ごしていても空白の3年間のことが彼の胸の片隅にいつもあった。空白の過去の唯一の手がかりは、持っていた家の鍵である。社長室で執務中にチャールズが秘書を呼ぶ場面があるが、資料を抱えて部屋に入ってきたのは、なんとポーラであった。実は、失踪した夫が実業家となっていたことを知ったポーラは、何とか夫の記憶をよみがえらそうとチャールズの秘書となって働いていたのである。事務的な会話の後、チャールズが親類の若い娘と婚約したことを秘書であるポーラに告げる。ポーラは、一瞬顔をこぼらせるが、すぐに何事もなかったように、部屋をでる。

結婚式の準備のため、チャールズと婚約者の娘が教会で賛美歌を選んでいたら、賛美歌「限りなき愛」のメロディーが流れると、チャールズは、不意に何かにとりつかれたように空を見つめた。そのメロディーは、ポーラとの結婚式で流れていたものであった。呆然自失したチャールズに気づいた婚約者が顔を覗くと、そこには、いつものチャールズはいなかった。過去の誰か以上にはなれないことが分かって、婚約者は、涙ながらに婚約の破棄を申し出る。自責の念にかられ、無断で旅に出てしまうチャールズ。一方、ポーラは、彼の旅先がリバプールであることを知り、後を追う。滞在先で、彼女は、ここに空白の過去を探す手がかりがあるのではないかとチャールズに教唆する。宿泊した可能性のあるホテルを探すと、ジョン・スミスと名前の入った旅行鞆が残されていた。しかし、ポーラの願いも虚しく、この安物の旅行鞆を前にして、チャールズの記憶はよみがえらなかった。

やがてチャールズは、実業界から政界へと進出することになり、有能な秘書であるポーラをますます必要と感じ始めていた。議員に当選した直後、チャールズが秘書であるポーラに結婚を申し込む。しかし、結婚といってもこれは偽装結婚に近いものだった。失意のままポーラは、チャールズの申し出を受け入れる。あるパーティの夜、疲れたポーラは、宝石箱の底にしまっておいた夫スミスの贈り物の安物のネックレスを手に思いこめていた。それを見てもチャールズは、自分の贈り物であることを全く思い出せなかった。しかし、彼は、12年たった今も、その過去の誰かをいつか探したせうな感じがするという。ポーラを秘書に採用する時にも一瞬何かを感じたというチャールズの言葉に、ポーラは、少し気を取り直し、「その人は近くにいたり、会っていても気づかないだけかもしれないわ。知人かも...例えば、この私かもしれない」と、いままで言いたくてもいえなかったことを一気に語りかけた。チャールズは一瞬驚いた表情を見せたが、「まさか」といって静かに微笑むだけであった。最後の望みを断られたポーラは、チャールズに背をむけ、しばらく南米へ旅にでたいと申し出る。

傷心のポーラは、南米旅行の前に、思い出の宿に宿泊すべくメルブリッジへと汽車で向かった。一方、チャールズもメルブリッジの工場ストライキ收拾のため、初めて(とチャールズは思っていた)同地へと向かう。ストライキを無事收拾して、部下とともに町の酒場で一杯やり、煙草屋へ立ち寄ったチャールズに、部下がここは初めて訪れた所なのにどうして煙草屋が分かったのかといぶかしげに聞いた。チャールズは、はっとして、あたりを見回すと、酒場、煙草屋、煙草屋の女主人に見覚えがあることに気付く。タクシー運転手に、かすかに思い出した病院がこの辺に無いかと聞くと、教えられたその病院は彼が収容されていた精神病院であった。ようやく失われていた過去を掘り起こす手がかりが得られた。

翌朝、宿を出ようとしたポーラは、宿の主人から昔住んでいた家や教会の牧師のことを尋ねにきた男がいることを聞いた。もしやと思い、昔住んでいた家に駆けつけてみると、その時、チャールズは、見覚えのある家の前に立ち、庭の小さな扉をあけ、花いっぱいライラックの枝を手でよけながら、玄関へと歩いていくところだった。肌身はなさず持ち続けていた家の鍵を鍵穴にさしこむと、玄関ドアは音もなく開き、見覚えのある室内が現れた。立ち尽くすチャールズの背後から、「スミシー！」と夫の愛称で呼びかけるポーラ。チャールズは一瞬ぎくりと体を震わせ、振り返ると、そこには愛妻のポーラが立っていた。チャールズは、「ポーラ！」と初めて呼びかけ、二人は駆け寄って抱擁するのであった。

記憶喪失という題材を中心に据えたこの映画で行動分析的に重要なのは、記憶喪失という現象それ自体ではなく、記憶を喚起する手がかり刺激(弁別刺激)の問題である。チャールズの記憶をよみがえらせたのは、映画の中で表現されているように、家の鍵、安物の旅行鞆、贈り物のネックレス、そしてポーラ自身(!)という個々の刺激ではなく、むしろ、昔住んでいた場所という文脈であった。この映画の最後の場面に示されているように、この文脈のなかで、初めてポーラ自身も弁別

刺激となつて機能したといえるであろう。文脈とは、刺激を機能させる条件のことである。これと同じようなことが、実験場面でも生じる。例えば、通常のハト用実験箱(30cm x 30cm x 30cm)でキイツつき反応を十分に訓練されたハトが、大きな空間(1.8m x 1.8m x 1.9m)に置かれた同じキイツをつかかないことがある。つまり、小さい空間(実験箱)に置かれたキイツをつつく訓練を受けたハトにとっては、同じキイツが、大きい空間(フライケージ)という異なる文脈では、弁別刺激として機能しなかったのである。行動分析では、刺激を機能の面から定義することが、スキナー以来の基本的考え方である。刺激の機能的定義とは、行動への効果のことである。換言すれば、行動への効果が認められるまではその刺激の機能に言及できないことを意味する。刺激の定義の問題は、つまり、行動の問題なのである。空白の3年間を思い出す最後のクライマックスで、チャールズがメルブリッジの町を歩くことで、記憶がよみがえるシーンはこの意味で象徴的である。

映画「心の旅路」の最後の場面は、刺激の機能は行動と密接に結びついていることを如実に示しているといえよう。

海外留学報告:

応用行動分析の教員養成大学院:オハイオ州立大学

遠藤清香(オハイオ州立大学)

昨年9月より、アメリカのオハイオ州立大学教育学部(特殊教育専攻)の博士過程に留学しています。この専攻では行動分析学の教育場面への応用に焦点を当てた研究がなされており、教授として、グループ・インストラクション専門のヒュワード先生(私の指導教授)、プレジジョン・ティーンズのクーパー先生、LD児専門のヘロン先生、自閉症児専門のセナト先生などがいらっしやいます。博士過程には計8人の学生(3年生3人、2年生2人、1年生3人)が在籍しており、少数ならではのアウトホームな雰囲気毎日を送っています。またこの大学では、研究を進めるだけでなく、行動分析学の理論に基づいた教育技術を獲得するというのも目標とされており、修士課程には現職教師がパートタイムで入学したり、また、これから教師になろうという人もたくさん在籍しています。

さて今回は、オハイオ州立大学での授業の行われ方とカリキュラムの概要を紹介します。1つの授業は週1回2時間半で行われ、約10週間で終わります。授業形式は、講義形式・ディスカッション形式のいずれかで、講義形式のものは修士・博士共通、ディスカッション形式のものは基本的に博士対象となっています。

講義形式の授業はその名の通り教授の講義なのですが、学生は全員、教授が作ったガイドド・ノート(授業1回でA4用紙10枚ぐらい)というものを購入し、それをもとに講義を聞きます。このガイドド・ノートは講義の内容と関連資料がまとめられたもので、キーワードの部分が空欄になっています。学生はその空欄部分に書き込みをしながら講義を聞くのです。そして毎回、その回の内容に関連したテキスト・雑誌記事などを読んでくるというのが宿題になります。講義・宿題の内容は毎週または隔週の小テストで確認されます。成績は授業への参加・小テスト・中間テスト・期末テスト・レポート(雑誌記事レビューや行動観察など実習的なもの)の合計で決まります。またB以上の成績を取り続けられなかった場合は退学になります。このように、講義形式の授業には学生の勉強行動を維持する随伴性がきちんと設定されているので、どの学生もよく勉強しています。

ディスカッション形式の授業はセミナーと呼ばれるゼミのようなものが中心です。毎週教授が用意した文献(4本ぐらい)を読み、それに関する質問を用意するのが宿題です。授業では各自の質問を発表してそれについて議論します。また、自分が用意した質問と読んだ文献の要約または批評を提出することになっており、それで成績が決まります。この他にオハイオ州立大学では「テレカンファレンス」というセミナーが設置されています。これはいろいろな大学の教授にゲストとして電話で参加してもらい、そのゲストに質問を行うというものです。各ゲストは参考資料として発表前の最新の研究を送ってくれるのでそれを中心に質問します。いい質問をするとゲストが「こちら勉強になった」と言うので、みんな頑張って質問を考えています。

最後に、博士過程のカリキュラムを紹介します。最初の2年間で約100単位分の授業を履修することになっています。以下リストです。私が履修したものにはコメントを添えました。それぞれの授業の詳しい内容について、機会があればまた紹介したいと思います。

【博士過程1年秋学期】

■「教師のための応用行動分析」教授:クーパー。教科書:Cooper, J. O., Heron, T. E., and Heward, W. L. (1987). Applied behavior analysis, Columbus, OH: Merrill. の中間部分。行動分析の理論(三項随伴性、刺激性制御)を教育場面でおこる事例を取り上げて勉強しました。 ■「教育場面での行動的研究1」教授:ヘロン。教科書:Cooper et al. (1987) Applied behavior analysisの前半部分。方

法論の授業です。観察の仕方、独立・従属変数の決め方、グラフの作り方・結果の解釈法などを勉強しました。■「テレカンファレンス」上で紹介した通りです。ゲストの中ではスターツ先生、サンドバーグ先生が印象に残っています。■「統計(研究法)」■個別学習 これは各自指導教授と相談して決めた内容を勉強するものです。私はこの個別学習として以下2つの授業を履修しました。□「特殊教育入門」教授:ハウエル。教科書:Heward, W. L. (1996). *Exceptional Children: An introduction to special education*, 5th edition. Columbus, OH: Merrill. 発達遅滞・学習障害・言語障害・視覚障害・ギフトなどいろいろな障害を持った子供の特徴と教育の際に注意しなければならないことなどを勉強しました。□「グループ・インストラクション」教授:クーパー(本来はヒュワードの講座なのですが、今学期彼は休みだったため代わりにクーパーの授業となりました)。教科書:なし(関連する雑誌記事が配られました)。20人から30人ぐらいの生徒に一齐に講義する際、すべての生徒が集中し効果的に学ぶための教示方法を勉強しました。

【博士過程1年冬学期】

■「学校・家庭・医療場面での行動的コンサルテーション」 ■「プレジジョン・ティーチング(理論と実習)」教授:クーパー。教科書: *Journal of Precision Teaching*, 1995, 12(2). プレジジョン・ティーチングという、教えたことが生徒に正しく習得されているかを確認するための技術の使い方を講義と実習で勉強しています。オハイオ州立大学はある小学校と提携しており、この授業を履修した学生は、1対1でその小学校の生徒の補講を行います。各生徒の苦手な科目(読み・数学・スペリングなど)を好きな方法で教え、その教え方が効果的かどうかをプレジジョン・ティーチングの技法で確認し、効果的でなければ別の教え方をします。私の生徒は算数の苦手な4年生なのです。答えあわせをしたあと出来た数を一緒に数えるのですが、私はどうしても nineteen の次を twelve と言ってしまうので、生徒に「ちょっと待って」と指摘されます。■「般化のための教示方法」教授:ヒュワード。教科書:なし(関連文献配布)。トレーニング場面で教えたことをそれ以外の場面で起こりやすくするためのトレーニング法について勉強しています。■「教育場面での行動的研究2」教授:クーパー。教科書: Johnston, J.M. & Pennypacker, H. S. (1993). *Strategies and tactics of behavioral research*, 2nd Edition. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 博士過程対象の方法論の授業です。基礎研究と応用研究の違いや研究テーマの選び方など勉強しています。■「統計(研究デザイン)」

【博士過程1年春学期】

■「特殊教育におけるエマージング・テクノロジー」 ■「教育場面での行動的研究 3(批判的分析とセマティック・エクステンション)」 ■「専門的ライティング」雑誌記事の書き方を勉強して、1本論文を投稿してみるという授業と聞いています。■「統計(データの分析と解釈)」

【博士過程1年夏学期】

■「障害児のためのプログラム・マネジメント」 ■「特殊教育におけるパラダイム論」 ■インターシップ ■個別学習

【博士過程2年秋学期】 ■個別学習 ■「心理学史」 ■「行動主義1:強化随伴性」 ■「テレカンファレンス」

【博士過程2年冬学期】

■個別学習 ■「行動主義2:社会的応用」 ■「セミナー:初等特殊教育」 ■「セミナー:校内暴力の予防」

【博士過程2年春学期】

■個別学習:博士論文に向けての予備実験 ■「セミナー:教育場面での行動分析」 ■「セミナー:障害児」 ■「行動主義3:言語行動」

【博士過程2年夏学期】

■博士候補生になるためのテスト 教授全員を相手に2時間の面接を受け、パスしなければ博士論文を提出できないそうです。

【博士過程3年秋学期】

■「セミナー:高等教育のための技術」 ■「テレカンファレンス」 ■博士論文要旨提出

【博士過程3年冬・春・夏学期】

■博士論文の執筆

お願い

・J-ABAニュースの発送は事務局の山岸氏が担当しています。住所変更などは編集局ではなく事務局までご連絡下さい。尚、事務局の電子メールアドレスが変わりましたので、メールでのお問い合わせには以下の新アドレスをお使い下さい。

旧アドレス VYC13337@niftyserve.or.jp

新アドレス j-aba@komazawa-u.ac.jp

J-ABAニュース編集局 〒772-0866 鳴門市高島 鳴門教育大学 学校教育研究センター 島宗 理
TEL 0886-87-1311(内602) FAX 0886-87-1203
E-mail simamune@naruto-u.ac.jp

皆様からの記事を募集しています。研究室や施設の紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人求職情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイルの形式で、電子メールかフロッピー(DOS/Mac)により編集局までお送り下さい。2000字程度を目安にし、本紙1-2頁におさまるように考えていただければ結構です。次号の〆切は98年5月5日です。尚、掲載された記事の著作権は日本行動分析学会に属し、ホームページへの公開を原則としています。メールアドレスなど、一般公開を望まない情報がある場合には、事前に編集局までお知らせ下さい。

J-ABAニュース 第10号 発行 日本行動分析学会 〒154-0012 世田谷区駒沢1-23-1
駒沢大学文学部心理学研究室内
E-mail: j-aba@komazawa-u.ac.jp
TEL:03-3418-9305,-9303
FAX:03-3418-9126